

## 「小さな鍵穴」から故郷の再生を夢見る人

皆木信昭詩集『心眼』に寄せて

1

皆木信昭さんのように、詩作と故郷が深い関係を切り結び、そのことを必然化して決定的な影響を受けている詩人は数多くはない。皆木さんは、古代から美作国みまさかのくにと言われた岡山県勝田郡豊並村（現在の奈義町）皆木四八〇番地に農家の次男として生まれた。兄が教師になってすぐに病死したことで、皆木さんは家を継ぐことになった。宿命的に父だけでなく兄の遺志も引き継ぎ、奈義町に定住することが課せられていた。家業の農作業を行い、皆木さんは終戦後に岡山大学農学部で学び、卒業後は地元の日原高校の教師となった。初期の詩には、故郷の中で教え子たちが精一杯に生きている姿に共感して書かれた詩群が多くある。きつと様々な条件下で健気に生きる教え子たちに皆木さんは感動し、そのことを戦後社会の希望のように詩に記している。皆木さんの第一詩集『望郷の歌』は、詩を書き始めて二十年近くたった一九六五年に刊行された。その第一詩集は日本原高等学校を転出することになり、卒業生たちによって提案され制作されたという。皆木さんは、この高校の生徒のために、逍遙歌、記念祭歌、

惜別の歌などの多くの作詞を書いていたという。その歌詞は歌い継がれ、きつと多くの生徒たちから愛された教師であったのだろう。その詩集に「夢」という詩がある。

### 夢

——定時制高校生徒と共に——

未来に描いた夢が破れます  
破れた夢は夜霧にぬれて  
過ぎた日の幸せを思い出させます  
いくら恋いしがつても懐かしんでも  
もう帰ってはこないのに

愛することを知った日から  
心に淋しさが宿るようになりました  
淋しい人間は人一倍夢を描きます  
描けばさらに淋しさがつのと知りながら  
人生がこんなに苦しいとは  
つゆにも思いませんでした

それでも夢は持ちつづけたいと思います  
厳しい人の世を生きぬいて  
こころの園に白い花を咲かせるために

ただ黙々とくろぼく\*1を掘った  
松の根株やぐいぐろが散在し  
笹や芝がいつぱい茂っている原野が  
やがて平らな畑になるまで

そこにさつまいもの蔓を挿し  
陸稲おしかほを播き 麦の種をおとした  
一生懸命肥やしをやり  
草とりをしたけれど

さつまいもは犬のふぐりくらい  
陸稲や麦は五〇センチほどの背丈  
それでも君たちは  
ただ黙々とくろぼくを掘りつづけた

雨の日は  
地下足袋の中に泥水がしみこんで  
歩きたびにズクズク鳴った  
旱天つづきの日は  
くろぼくの小さな粒子が

肌着やズボンの織り目を通して  
へソの穴にまでまっくろにたまって  
みんな黒んぼのような顔になった  
吹雪の日は

ふり仰ぐ空があおいたために  
日が降り星がまたたくために

この「夢」という詩の特長は、「未来に描いた夢が破れ」ることから始まっていることだ。きつと皆木さんは多くの定時制高校生から将来の夢を聞いたのだろう。そんな高校生が抱いた夢が、家族や故郷の環境によつて踏みにじられて行くことの痛みを皆木さんは真正面から受け止めていたのだ。そして夢が破れた孤独な「心の淋しさ」こそが、新たな夢を育む母胎であると告げている。人生の苦しさを感じる度合いの大きい人間ほど、じつは夢を持ち続ける土壌が豊かであることも語っている。そしてその夢を生み出す心に「白い花を咲かせるために」人は生きるべきであると、定時制高校生たちと一緒に困難を克服していくことを夢みようとしている。私はこの詩を読んで、困難な現実の世界を変えて少しでも夢に近づいていこうとする、誠実な若き教師であった皆木さんの秘められた情熱を感じた。

また第一詩集の中で「くろぼく」という詩があり、岡山県北の自然の宿命を記している。

くろぼく

君たちは

鍬をふるう手がかじかんでしびれて  
大きなあかぎれがいくつもできた

リンゴの木を植え

なしの木を植えて

学校農場の果樹園をつくった

一生懸命手入れをし

奥山からの芝草を刈ってきて入れたけど

ひと晩のうちに広戸風<sup>\*2</sup>が

せつかく大きくなった木を

根こそぎ倒していった

君たちは

自然のきびしさを呪い<sup>\*1</sup>

くろぼくと闘う宿命を心から憎んだ

呪えるかぎり呪い

憎めるだけ憎んだとき

ふと心の中に

湧いてきているものに気がついた

これほどまでに苦しめられる現実

否定しきれない親しみと愛と真実

生きることのすばらしさを知った

その日から

君たちの心は結ばれた

どんな苦しみにも耐えよう

どんな悩みにも負けまい

このくろぼくに

子どもの頭ほどのさつまいもが入り

みずみずしいリンゴの実がなりだしたら

ぼくたちの手で

僕たちの学校をつくったことになる

僕たちの幸せをつくったことになる

(前半部分)

\*1 強酸性火山灰土

\*2 岡山県北の一部に吹く日本三大局地風

皆木さんのこの詩には、戦後の岡山県北で高校生と一緒に  
なつて土壌改良や食料増産に励んだ実践的な農業教育が記さ  
れている。「くろぼく」には、強酸性火山灰土との註がある。

「くろぼく」の性質は、土とりんと結びつきが強すぎるの  
で、作物に必要であるりんが吸収されず欠乏状態になり、う  
まく育たないそうさだ。また「広戸風」とは、日本海から吹き  
寄せる北よりの風が、鳥取県のV字谷で勢力を増して那岐山  
系を越えて奈義町に吹き降りてくる風のことをいう。平成に

合いを持たされていたのかも知れない。「鍵穴」は、詩的想像  
力を駆使することの大切を感じさせてくれ、「道の顔」は詩か  
ら人生の味わいが辿ることができ、「遠い秋」には世界が存在  
することの不思議さや憧れの存在を予知する詩的精神などを  
感受させてもらった。「鍵穴」を引用してみる。

## 鍵 穴

あおい空に

鍵穴があるとは

馬鹿げた幻想だと

ホモサピエンスが否定する

私もその例外ではない

土にまみれて働きとおした父が

八十五歳のある日

突然倒れて動けなくなった

俗に言う中風らしい

多少涙もろくなった以外に

呆けたように思えないが

ベッドの上で空ばかり見ている

入って最大規模の二〇〇四年の台風二十三号によって広戸風  
が発生し、最大瞬間風速51・8 m/sを記録したこともある。  
奈義町が好天であつても台風や発達した低気圧の影響によつ  
て突然発生することもあるそうさだ。そのために奈義町の家々  
の北側には防風林が植えられている。今年になって私が初め  
て皆木さんを訪ねて奈義町に入った時に、皆木さんの運転す  
る車からこの防風林の家々を見ることができ、この風土で暮  
らすことの過酷さを実感できた。このような「くろぼく」と  
「広戸風」などの自然の力に立ち向かつていく奈義町の人々  
の不屈の精神が、この詩を皆木さんに書かせたのだろう。そ  
んな奈義町の人々にとって「くろぼく」や「広戸風」と共存  
しながらサツマイモやリンゴを収穫することが、どんなに苦  
難に満ちた皆の「夢」の実現だったかをこの詩は示している。  
皆木さんの詩は、その意味でこの奈義町の苦悩と「夢」を体  
現していたのだ。

皆木さんの第二詩集『遠い秋』は一九八一年に刊行された。  
五十三歳の時で、十七年ぶりに出された詩集だった。この詩  
集の各篇には、様々な試みがなされていて、後の「ごんご」  
(かっぱ)の連作である三詩集を予感させる発想を秘めた詩篇  
も見うけられる。私には「鍵穴」「道の顔」「遠い秋」の三篇  
の詩が魅力的であり、しかも皆木さんにとって詩論的な意味

あの空の奥に

長年温めたものをしまいいこんでいて  
形見分けにとり出そうと思うのだが

どんな鍵で扉が開くのか

鍵穴の形を探しているのだそうだ

萎えてしまった手で

開けられるはずがないじゃあないか

私も空を覗きこんだ

渺茫として無限

たしかに小さな鍵穴が見える

この「鍵穴」には、中風で倒れた父の視線で眺められている「空の奥」がテーマになっている。ここでは父が「長年温めたものをしまいいこんでいて」、「形見分け」してくれるそうなのだ。しかし父はその場所の鍵穴を開ける力をなくしてしまった。皆木さんはそれでも諦め切れないで、その鍵穴を空の中から探した。そして「小さな鍵穴が見えた」ことでこの詩は終わっている。皆木さんは若くして亡くなった兄に代わり父から家督を譲られた。しかし真に引き受けるものは何かという問いが皆木さんにはあったのではないか。奈義町の過酷な自然条件の中で「土にまみれて働きとおした父」の

貧しさに耐えるために

孤高をつらぬくために

すべてを拒絶し

空のおおさまで突き刺し

避けることができなかったから

抑えることはもっと難しかったし

諦めるには怒りと憎しみがあつた

それがいったい

なんの怒りか

何に対する憎しみか

それさえ分らなかつたが

穂波を渡る風は

かなしみの塊となって

小さな峡のはざ間を通り過ぎ

筵旗を押し立て

竹槍を担いで

村を出ていった人たちと同じように

再び帰って来なかつた

重くぶら下がった日々を

早天が染めた

身をすり減らして種実が熟れた

くたびれはてて眠る夜は

真実 生きることわりの

八十五年の生涯は、決して父から語られることはないが、一人の農民の重みとして皆木さんの中で雄弁に甦って来たのではないか。「小さな鍵穴」とは、父のような専業農民たちの視線を現在に生かそうと試みようとしたのではないか。皆木さんはこの岡山県北で生き続けてきた農民たちを忘れてしまったら、この地に宿っていた地霊は死滅していき、この場所でする人々のエネルギーもまた枯渇していく危機感を抱いたのかも知れない。その危機意識が生きている場所の「空の奥」にある「小さな鍵穴」という詩的想像力を駆使して、皆木さんに本格的な詩作を促したのだろう。

第三詩集『明かり』は、三年後の一九八四年に刊行された。この詩集には父を中心とした家族の働くさまや戦前の県北の農民の暮らしの日常風景が様々な観点から克明に記録されている。「麦踏み」「麦・鎮魂」や「麦めし」などはもちろんだが他の詩篇も麦作りと麦を主食にする故郷の暮らしの哀歓を甦らせた詩群だ。「麦・鎮魂」を引用してみたい。

#### 麦・鎮魂

生ぶ毛のようにやわらかい芒を  
陽に焼いて鍛え  
鍛えた鋼を刃に研いで  
烈しく身がまえ

ただせつなくて

しのび泣くにも似て

せせらぎは

おぼろ夜更けの露を

涙の玉に結んだ

一つぶ 二つぶ

固く閉じた瞼の上で

涙は星になって

働きに出た娘の手紙のことばのように

山と山の間の小さな空に瞬いた

朝が来ても昼になっても瞬きつづけた

村じゅうに麦が作られていた頃は

百姓ということばが聞かれた

麦が姿を消していくにつれて

百姓ということばは聞かれなくなりだした

いまはもうこの地方では

麦を作らなくなってしまうと

ご飯といえば米の飯

百姓ということばを

口にする者は一人もいなくなった

ときどき思うのである

麦は

遠い僕たちの姿だった  
遠い僕たちのころだったと

私はこの詩を読み、皆木さんが百姓の深い心情を記した農民詩の優れた実作者であることに驚かされた。農民詩の奥にもっと泥臭い「百姓詩」のようなものがあるのなら、この詩はそれにもっとも相応しい傑作の詩篇だと感じられた。山間部の百姓は、麦作りに誇りを持って暮らしていたという。その過酷な労働条件であっても、その喜怒哀楽をこれほど胸に抱え込みながら自然と共生していた。しかし様々な社会的な条件が変わり始めて、麦を食べる人々が少なくなり、百姓が麦作りを辞めた時から、百姓という言葉もまた衰退していったという指摘は、多くの示唆に富んでいる。皆木さんは父の「小さな鍵穴」を通して百姓の「かなしみの塊」を受け取り、それを語らざるを得なかったのだろう。この詩行のリズムは麦の「穂波を渡る風」であるだろう。最終の三行の「麦は／遠い僕たちの姿だった／遠い僕たちのころだった」と語る皆木さんは、「百姓詩」の心情を汲み上げて新たな農民詩を記そうと決意し、実践してきたに違いない。

3

第四詩集『横仙』の「横仙」とは奈義町と鳥取県の間にある那岐山を含んだ連峰で、ここから「広戸風」が吹き降る

されてくる。奈義町の人々はこの山々を畏れながらも誇りにしてきた。タイトル詩「横仙」を読めば、その複雑な思いが皆木さんによつて明らかにされている。

横仙

諾仙<sup>\*1</sup>

滝仙

広戸仙

山形仙

それらの峰が東から西に連なつて

横仙

へ仙のみ山のおとどい鴉

どちらが姉やら妹やら<sup>\*2</sup>

秋になると

毎年 仙の山から風が吹き

いち度ならず二度ならず

多い年は十数回

民家や田畑を荒らし

ときには雨をともなつて

道を潰し 橋を流し 田んぼを川原にした

当村ノ儀ハ諾山ト申ス北ニ高山並ニ風ノ宮ト

申ス広戸仙ニ風穴山御座候故ニ毎々台風ニ而  
難儀仕候尚又大雨ノ節ハ諾山ヨリ落合洪水出

来水損毛御座候……<sup>\*3</sup>

大風が吹きだすと

雨戸を釘づけし

家につつかい棒をし

夜になつても明りをつけず

家族寄りそつて

おのれの罪業を悔い

身の汚れにおののき

神の怒りにうちふるえ

ひたすら祈つた

声にならない祈りに

杜は泣きわめき

あばら屋はギシギシ鳴りつつけ

ゆれにゆれて

風が吹き終ると

田んぼの稲の穂は全部持ち去られていた

ひとりよがり以利己的で

こすつたれで けちんぼで

それでいて人情にもろくて

諦めやすく単純で

反抗的などころがあるようでないようで

暗く

重たく

牛のように粘りつよいところもいくらか

主体性がないと言えればそれまでだが

風に逆らわず

景気 不景気

エレクトロニクス 近代化

どんな風であろうと

風の色に染まり

風と笑い 風と泣き

風に祈つて

横仙の人たちは

生きてきたのである

生きていくのである

\*1 那岐山が正式名、鳥取・岡山両県を割す氷の山後山那岐山国定公園の主峰の一つ

\*2 横仙地方に古くから伝わる地唄

\*3 一八四九年勝北郡近藤村明細書上帳

広戸風の下で生き続けてきた民衆の知恵と心根を書き記すために皆木さんは、この詩集を試みたのだろう。その思いが十二分に伝わるものになっているだけでなく、異郷の人々が

読んでその徹底した地域性が逆に普遍性へと繋がる「小さな鍵穴」を感じさせてくる詩群なのだ。『横仙』の詩篇は、今も奈義町の人々の間で朗読されていると聞いており、皆木さんの詩が郷土の誇りとされて大切にされているに違いない。詩が山河や大地から離れ、机上の言葉遊びに向かい、暗喩の迷路を彷徨うことが、詩の進化のような言説を振りまいている詩人たちとは、全く異なる詩人像を私たちは皆木さんに見ることができる。日本の口語自由詩の原点であり源泉には宮沢賢治が存在するが、皆木さんは宮沢賢治の系譜で考えれば、なんら特別な存在ではない。むしろ根源的に地方に根ざした詩人が目指すひとつの方向性は、宮沢賢治や皆木さんのような農村の民衆と共に生きようとした詩人のあり方であろう。皆木さんはその試みを生涯に渡って成し遂げようと試みている。私には『横仙』という詩が、奈義町全体を包み込みながら現代の優れた農民詩として試みられて、皆木さんにか書けない「百姓詩」の代表的な詩篇であると思われる。山々の木が皆んなの木であるというコミュニティ的な意味合いを持った皆木さんの苗字は、地に根ざした民衆思想を体現してくるかのようにも感じられてくる。『横仙』にはこの地域の様々な存在の細部が掛け替えのないものとして立ち現れてくる。例えば「野仏」、「水車」、「こんげ」（れんげ）、「せんぶり」、「いなばの魚売り」、「荒神さま」などだ。それらを通して農民たちの暮らしの姿が浮き彫りになってくるのだ。

私は皆木さんに同行して頂き、美術品と建物が一体化している「第三世代美術館」と言われる「現代美術館」を見学した。荒川修作＋マドリン・ギンズの「太陽」の円柱の空間には、「奈義町の龍安寺」というテーマで、その側面にリアルな龍安寺の石庭が配置されていた。この空間は三次元空間ではない、今まで経験したことのない多次元空間に入り込み、私はその湾曲した空間を逃げ出そうとする一匹のトカゲになった思いがして冷や汗をかいた。また岡崎和郎の「月」には、「補遺の庭」というテーマで、月明かりの通り道となる細長い白い空間がある。すこしたわんでいて、金色の爪のようなオブジェがところどころ白い壁にあるだけだ。皆木さんに話しかけるとその声が無数に木霊して意味が解体されてしまうのだ。私は古代の月読みの世界に紛れ込んだ気がしたものだ。最後の宮脇愛子の「大地」には、「うつろい」というテーマで葦原をイメージさせるオブジェをステンレスのワイヤーで造形している。石を敷き詰めて水をイメージさせ、その上にたたくさんのステンレスワイヤーを葉の輪郭のようにたわませてある空間は、今ここにやすらぎの生み出す効果がある。その上には本物の那岐山の山頂が切り取られて借景となっている。このような地域に根ざしながらも前衛的な美術館を創り上げ、皆木さんは、とてもいい仕事をしてきたのだと私には改めて感じられた。

余談になるが、奈義町には一九九四年に開設された「奈義町現代美術館」がある。皆木さんは、教員を退職した後に、開設準備室長となり、建築家、アーティストそして町議会などの交渉や打合せをこなし、この「現代美術館」開設の中心的な存在となって尽力した。この「現代美術館」は、今までの美術館の常識を遙かに超えた非日常空間である。前衛的な建築家である磯崎新がカタログで述べている言葉を引用してみる。

《具体的には、ここでは三人だけのアーティストの作品が半永久的に展示される。(略)さし当たり、荒川修作の棟を「太陽」、岡崎和郎の棟を「月」、宮脇愛子の棟を「大地」と呼んでいるが、それは作品の内容を示したのではなく、むしろ建築的な形態より連想され「見立て」られたものである。「太陽」は円筒形をし、8分の1だけ傾いて、その軸は南北に正中している。「月」は半月形で、その湾曲していない側の壁は、中秋の名月が昇って、午後10時に位置する方向にむけられている。「大地」は半ば地下に埋められた部屋で、その中央の軸を更に拡張していくと、那岐という聖なる山を中央に据えて、手前に「大地」がひろがり、左右に「月」と「日」が配されるといふ構図となり、容易に、六曲一双の日月山水図屏風を想起することも可能であろう。》

#### 4

皆木さんは、その後の一九九二年に第五詩集『定年』を出し、「無辺の空」で父を焼いた煙が空の涯に溶けていく悲しみの情景を詩にし、二〇〇二年に第六詩集『ごんごの測』、二〇〇四年に第七詩集『ごんごの独り言』、二〇〇六年には第八詩集『ごんごの風』などを刊行した。この「ごんご」（かっぱ）の異界の視線から見詰められる奈義町の民衆の姿は、その硬化された存在感をしなやかにされて自由に描写された。また戦争に巻き込まれていく理不尽さや非情さは、「ごんご」を通して民衆の抵抗感によって暴露されてくるのだ。「ごんご」を想像した皆木さんは農民の根源的な自由を「ごんご」に託して、再生の可能性を試みていたのだろう。

新詩集『心眼』は、老いをテーマにしたものだが、老いと戦う姿勢ではなく、老いと共生する心構えを淡々と語り、老いの哲学を構築しようとしている詩集だろう。肉体が硬くなり衰えてきたら、逆に心をもっと柔軟にすることを書き記している。その徹底したしなやかさは、学ぶべきことが多い。皆木さんは生涯を通して実現不可能な夢を新しい夢に変える「小さな鍵穴」を探し続けている存在なのだ。最後にタイトル詩「心眼」を引用したい。この詩で仮に目が悪くなり人が二重に見えたとしても、悲観することはないという。人の欠点が見えずに、人がもつと美しく見えるだろうからと達観するのだ。心の目を持つことの効用を皆木さんは積極的に説いて

いる。老年の中にもみずみずしい感受性は宿り、生きる知恵が湧き出てくることを実証している。老年の方はもちろん、壁にぶつかり夢を捨てた後でも夢見る若者や壮年たちに、この皆木さんの自らの存在や故郷をも再生させていく不断の試みをぜひ読んで欲しいと願っている。

### 心眼しんがんめ

なんにちも日和がつづくので  
明日あたり雨が降らないかと  
夜空を仰いだら  
赤い星がくつついて二つ  
あれは火星のほずなのに  
見る方向で二つに見えるのか

両目で見ても  
片目で見ても  
月が二つ  
病院で診てもらったら

### 白内障

手術すれば治るのでしょうか  
まだそこまで進んでいません  
それなら当分このまま

ありがたいと思わなくちゃあ  
みんなには 一つが  
わたしには ふたつ

### 他人ひとの顔が

ぼやけて見えるからと  
悲観することはない  
顔の皺しわが無なくなって  
女房にようがだんだん若くなつていく  
人の欠点あはれが見えなくなつて  
みんな立派りつぱな人ばかり  
自分までなんだか偉偉くなる  
ものごとを見るのは  
目でなく心で見ると  
どこかで聞いたのを思い出した